



語学文学会と私

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学語学文学会 公開日: 2023-01-11 キーワード: 作成者: 伊藤, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010812

語学文学会と私

伊藤 一男

今この原稿の筆を執っているのは旭川ではなく、八王子である。又、締め切りも大分過ぎている。一年ほど前に心臓の手術をしてから、冬場の運動に不安を持つようになり、雪との格闘のないところの方が安心だということで、雪に縁の薄い場所への移住ということになった。住居は三分の一程の広さとなつてしまったので、様々な物を思い切つて手放した。それでも入りきらず、トランクルームにまで手を出したが、やつとの事で収まつたところである。その奮闘に時間をとられ、締め切りを過ぎてやつと取りかかっているような始末である。編集の方には大変なご迷惑をかけたが、事情をお汲みいただいて、何とかしようとしているところである。

語学文学会とは、平成五年、大学院設置に伴つて旭川校に赴任して以来、三十年近くお世話になつてきた。平成五年四月一日から医大の公務員宿舎に入居する予定で初めて北海道の地に足を踏み入れたのだが、先住者が赴任先の釧路が地震のため引越せないということで、数日間のホテル暮らしとなつたことなども、いい思い出である。その頃の旭川空港も、まだボー

ディングブリッジがなく、タラップを降りて、滑走路を歩いて出口に向かったことや、(まだその頃はあつた) 機内食のサンドイッチも懐かしく思い出される。その頃長男はやつと半年ほどの年齢であつた。その長男のところは孫ができたのは昨年の一二月であつた。その間の我が家の歴史は、語学文学会に重なることが多い。確か函館が会場だつた最初の頃、次男が自転車ですに接触したという連絡が入つた。翌日急いで帰宅したが、擦り傷でしかなかつたというのも、語学文学会に関わる思い出の一つである。

最初の冬は、次男の出産で妻は里帰りをしていたので、私は出勤や退勤の途中にスキー場に寄つたりしていたことも思い出される。

そういえば、最初の頃の語学文学会は、隔年で行われていた札幌での学科連絡協議会に合わせて行われ、それ以外の年に残りのキャンパスで持ち回りという形で行われていた。またそのころは岩見沢も会場になつていたので、同じ会場に戻るまでには一〇年近くの周期であつた。そのため、函館や釧路が会場の

際は一大イベントであった。前日に近くの温泉に宿を取り、カニなどを持ち込んで翌日に影響しない程度の前夜祭などをしていたことが懐かしい。

思えば私の古典文学研究は大きく二つの分野を中心としていた。一つは資料紹介と分析で、こちらについては主に紀要を中心に発表した。もう一つは文学論的な考察で、『語学文学』には六本の論文を掲載させてもらったかと思うのだが、それらを列挙すれば次のようなものである。「末摘花の唐衣詠―光源氏の評言をめぐって―」（『語学文学』三二号 平成六年）、「笑いの『大和物語』」（『語学文学』三九号 平成一三年）、「在次滋春の物語」（『語学文学』四二号 平成一六年）、「万葉集に見える縁語的用字」（『語学文学』四八号 平成二二年）、「万葉集の表記における選字意識」（『語学文学』五〇号 平成二四年）、「源氏物語評釈の異板―架蔵本二種を巡って―」（『語学文学』五五号 平成二八年）。平均して五年に一度の掲載ということになるが、これらを振り返ってみると、私の北海道教育大学在籍中に、どのような研究テーマに関心を持ってきたかがはつきりに見える。まず、物語の中の和歌への興味から始まり、次に『大和物語』の分析、さらに『万葉集』の表記への興味といったところが大きな流れということになるか。これらの内のいくつかは、『国文学年次別論文集』などへの掲載もあり、それなりの評価を得たものと自負している。これらを発表する機会を与えてもらったのも、ひとえに語学文学会のおかげである。

ただひとつ心残りなのは、単著の出版までは行き着かなかったことである。出版業界の状況を慰めにはしているが、文学研究者としては、自著を持つのは当然のことだと思っている。それができなかつたのはすべて自己責任ではあるのだが。

今まで、曲がりなりにも研究者としてやってこられたのは、語学文学会の力添えが大きい。ここで私はこの会から離れることになるのだが、ますますの発展を祈る。